

行政視察報告書

令和6年11月6日から11月8日までの3日間にわたり、行政視察を行った概要を次のとおり報告する。

令和6年11月26日

伊東市議会議長 中島弘道様

伊東市議会議員

(常任観光建設委員会)

委員長 井戸清司

副委員長 鈴木絢子

委員 竹本力哉

委員 青木敬博

委員 浅田良弘

委員 犬飼このり

記

- 1 視察都市
11月6日(水) 福島県須賀川市
11月7日(木) 山形県尾花沢市
11月8日(金) 山形県山形市
- 2 視察事項
常任観光建設委員会所管事項
 - (1) 須賀川市 「翠ヶ丘公園温浴施設等整備事業(Park-PFI)」について
 - (2) 尾花沢市 「就農移住者支援事業」について
 - (3) 山形市 「居心地が良く歩きたくなるまちなかづくり」について
- 3 視察の概要
常任観光建設委員会所管事項について、視察した各都市及び事業の概要は以下に記載のとおりである。

須賀川市

- ・ 市制施行 昭和29年3月
- ・ 市の面積 279.43km²
- ・ 人口 72,145人 (令和6年9月1日現在)
- ・ 世帯数 28,014世帯 ()
- ・ 令和6年度当初予算 一般会計 337億2,000万円
特別会計 155億4,973万2,000円
企業会計(収入) 64億5,175万円
" (支出) 78億 101万9,000円
- ・ 市の概要

須賀川市は、福島県のほぼ中央に位置し、北は郡山市、南東は石川郡、南西は岩瀬郡に隣接し、西に那須連峰、東に阿武隈高地の山々に抱かれ、市内中心部を阿武隈川、釈迦堂川が流れる豊かな自然と穏やかな気候に恵まれたまちである。

東北縦貫自動車道、国道4号、東北本線、東北新幹線、水郡線が通り、首都圏や仙台圏へのアクセスが容易で、高速交通体系に恵まれており、さらには県内唯一の空の玄関口、福島空港を有し、これらの高速交通網の整備により、人・物・情報などあらゆる分野において交流が活発化して新たな文化を生み出すなど、「臨空都市」として大きく成長してきた。

○ 翠ヶ丘公園温浴施設等整備事業 (Park-PFI) について

須賀川市議会を訪問し、翠ヶ丘公園温浴施設等整備事業 (Park-PFI) について、須賀川市建設部都市計画課 有我栄一課長、後藤宏章主事及び Greenhill Park 鈴木辰也氏からご教示いただいた。

1 翠ヶ丘公園の概要について

(1) 翠ヶ丘公園の現状

- ・ 市で唯一の総合公園 (都市公園) で、公園面積全体では29.9ヘクタールあり、大型遊具施設や駐車場を整備
- ・ 公園遊具の老朽化、東日本大震災による一部破損個所の修繕が進まない
- ・ 維持管理費は、委託費や光熱費を含め、年間約3,000万円程度

(2) 翠ヶ丘公園の利用状況

- ・ 4月のさくらまつり、11月の松明あかしのイベントに利用されている。

- ・朝夕の散歩、大型遊具で遊ぶ、野鳥観察会などで平時に利用されている。

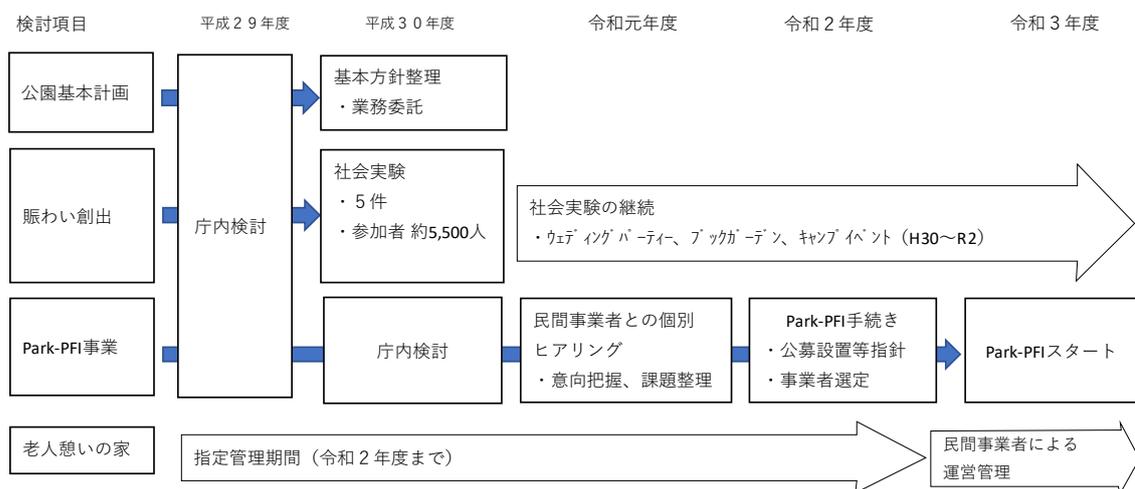
(3) 翠ヶ丘公園の課題

- ・管理面では、敷地が広大であるため維持管理が難しくなっている。
- ・運営面では、まちの賑わい創出に公園のポテンシャルを活かしきれていない。

⇒翠ヶ丘公園の新たな管理運営方法を検討する必要があることから、パークマネジメントにより、公園のポテンシャルを活かした、民間と連携した新しい管理運営体制をつくることとした。

2 パークマネジメント

(1) Park-PFIを開始するまでのスケジュール



(2) Park-PFI 事業者の募集

- ・公募設置指針（募集要項）の配布：令和2年6月29日から7月10日まで
- ・説明会の開催：令和2年7月10日（市内4社、市外2社）
- ・公募設置等計画の受付：令和2年7月20日から7月31日まで（応募数1社）
- ・選定委員会：令和2年8月21日
- ・基本協定の締結：令和2年9月23日（事業者：株式会社あおい）

※事業期間：協定締結から最大20年

- ・事業者による設計、工事：令和2年度から

3 翠ヶ丘公園の整備状況

(1) 事業の目的

約30ヘクタールの公園のうち、3ヘクタールの敷地を事業対象区域とし、公募により選定した民間事業者が管理・運営することで、公園利用者の利便性の向上と賑わいの創出、さらに、維持管理費の軽減を図る。

(2) Park-PFI で整備した施設

【公募対象公園施設】

都市公園利用者の利便性向上を図る上で、特に有効であると認められるもの

- ・ 温浴施設(Sauna&Spa Green) 令和4年7月工事着手→令和5年4月28日完成
- ・ 飲食施設(Jadegreen café) 令和4年4月工事着手→令和4年11月3日完成
- ・ " (鎌屋) 令和5年1月工事着手→令和5年5月12日完成



様々な形のサウナがある温浴施設



平日でも多くの人で賑わっていたカフェ

【特定公園施設】

事業者が計画に従い整備する園路等の公園施設で、公募対象公園施設の周辺に設置することで利用者の利便性向上に寄与すると認められるもの

- ・ 多目的トイレ（飲食施設に併設）、広場造成、給水設備、電気設備、ステージ、水路浄化システム、管理用倉庫

(3) 事業費

- ・ 公募対象公園施設：約8億円

【全額 Park-PFI 事業者の負担】

- ・ 特定公園施設：約2億円

【事業者 約1.5億円、市 4,950万円(うち国費 2,475万円)】

4 所感

- ・人口7万2,000人の須賀川市、伊東市とそこまで規模が変わらないので取り組みを見に行くのをより楽しみにしていた。まちの中にある大規模な公園を Park-PFI を用いて飲食・物販、温浴施設を設置するなど、利用者目線にたったものが様々あり、利用者が利用したくなる、活用したくなる取り組みが織り込まれていた。委託を受けた民間の経済力があることも大きな要因ではあるが、管理運営委託するまでに行った、コンサルタントを起用し、サウンディング調査、公募設置指針の策定業務、また社会実験を通したイベント時の集客性や公園利用の需要調査など、様々な下準備がきめ細かく行われており、その結果が市民が利用したくなる、賑わいをもたらす公園へと変化できた要因であると感じた。取組を行う前にしっかりと調査、研究する時間を持ち、しっかりと市民ニーズを把握する大切さを改めて感じた。
- ・ウルトラマンを全面的に押し出した振り切ったPRは、できるようでできないと感じた。当市でも、歴史、自然、温泉という強力なコンテンツをもっと角度を付けた、ある意味振り切った施策を打つべきであると思った。Park-PFI を活用した事業は素晴らしかった。本市も Park-PFI を活用した事業は展開すべきであると思ったが、成功するためには、有能な民間事業者がいてこそだとよくわかった。Park-PFI を本市でも実施する場合、民間事業者を市内県内に限らず広く募集すべきだが、須賀川市の実施状況を見て、まず重要となることは、詳細な企画（プロポーザル案）を練り上げる事であると思った。
- ・Park-PFI で、公園の一部のおおよそ3ヘクタールを民間が利用することにより、市の維持費が安く済んでいた。そのために行った施設整備の費用は9.5億が民間で、5千万が市であり、民間側の投資回収手段、または施設の維持費の調達プランはカフェの売上げ、温浴施設の売上げになる。正直なところ投資回収としては難しいと感じたが、地元の建設企業の社長が地元への貢献の意味合いも含めて投資しているような感じを受けた。民業圧迫になるような場所に似たようなものがないというのも重要だと思う。改修前は80件ほどの駐車場でことたりたのに、その改修後は足りなくなるほど人気となっていた。ここは特殊な例だとは思いますが Park-PFI の手法は今後研究する余地があると感じた。
- ・広大な敷地の総合公園に Park-PFI 制度を導入して、10億円の事業費のほとんどを地元民間企業が負担していることに驚愕した。契約期間を10年間としており、さ

らに10年間延長することが可能となっているものの、採算取れるのか不詳だが、地元愛の為せる技なのか。温浴施設は料金が3.6倍になっていることから、誰でも気軽に使えなくなってしまうのではないかと感じたが、特にサウナは別料金とのことで、PFIを実感した。カフェは有名企業誘致ではなくオリジナルであることに好感を持てた。テラス席はペット可で、犬用フードの用意があるのは嬉しい。いわゆる公設民営とは少し距離がありそうだが、事業者のアンテナ感度が高く今後の進化も期待したい。

尾花沢市

- ・ 市制施行 昭和34年4月10日
- ・ 市の面積 372.53km²
- ・ 人口 13,660人 (令和6年10月1日現在)
- ・ 世帯数 5,163世帯 (//)
- ・ 令和6年度当初予算 一般会計 143億7,000万円
特別会計 46億9,877万5,000円
企業会計 5億1,273万3,000円

・ 市の概要

尾花沢市は、山形県の最北東に位置している。標高は50mから1,500mと起伏に富み、奥羽山脈や出羽丘陵などの山々に囲まれた盆地を形成しており、東は県立自然公園御所山（舟形山）連峰がちな奥羽山脈で宮城県に接し、南は東根市と村山市に、西は大石田町に接している。

短い日照時間と低温、多湿、多雪のため、春の融雪が遅く、農耕期間が短いのが尾花沢盆地の特徴であり、冬の季節風が月山や御所山等の稜線にさえぎられ、雪を多く降らせるため、平野部でも積雪量が2mに及ぶことがある豪雪地帯である。

○ 就農移住者支援事業について

尾花沢市議会を訪問し、就農移住者支援事業について、尾花沢市農林課 五十嵐満徳課長からご教示いただいた。

1 事業の目的

尾花沢市の農業は、水稲、尾花沢スイカ、畜産（肉用牛）、そばを主としている。

農業生産額は年間約110億円となっており、米が約20億、スイカが約40億、肉用牛が約40億となっている。特にスイカについては、収穫量が約2万5,000トンあり、東北地方への出荷にとどまらず、関東や関西方面へも出荷しており、7月及び8月の生産量が全国一となっている。しかしながら、農業者の高齢化や担い手不足が大きな課題となっており、尾花沢市の夏のスイカ生産量を維持することを目的として、新規就農者を増やすための取組を行うこととした。

2 事業の概要

(1) 支援メニューについて

- ・単身者であれば月10万円、夫婦であれば月15万円という生活費を支給しており、これは国が定める支援額を大きく上回るもので、経済的な不安を軽減し、安心して農業に専念できる環境を提供している。また、尾花沢市の事業と国の事業を併用することはできないものの、市の事業を利用した後、国の事業を利用することは可能となっている。
- ・生活費だけでなく、住宅費、車両費及び燃料費など、就農に必要な費用を幅広く支援するメニューも用意している。
- ・就農相談から研修、そして就農後の経営指導まで、一貫したサポート体制が整っており、経験豊富な農業指導員が、栽培技術や経営ノウハウを丁寧に指導している。

(2) 事業の実績及び就農後の生活について

- ・事業の実績として、令和3年度は5人、令和4年度は2人、令和5年度は8人となっており、事業利用者の定住率は100%となっている。
- ・新規に就農を希望する方は、全員スイカ生産を希望しており、希望する要因として、スイカは新規参入しやすく、高収入を期待できるためである。4月から10月までスイカだけを生産したとする所得モデルとして、1キロ当たり279円の単価であり、栽培面積を60アールとし、所得率を4割とすると、約257万円が想定所得となり、国からの経営開始資金150万円を加えると、407万円となる。
- ・就農を希望する移住者が確保できる農地は、農業委員会や就農相談を受けてくれる農家と一緒に探す仕組みとなっており、主に高齢化により、耕作面積を縮小しようとしている農家の土地を譲り受けている傾向がある。そのため、耕作放棄地の解消までには至っていないが、耕作放棄地を増やさないといった効果はある。

(3) 今後の課題

- ・令和6年度から「尾花沢すいか農学校」を開設し、栽培技術習得のための研修（1～2年）から、就農後の青年等就農計画の実現まで（5年）をトータルサポートする体制を整備している。課題としては、スイカに関する研修を農学校だけではなく、農協、県及び若手農業者団体がそれぞれ行っていることから、研修をより効果的にするため、合同研修を行うほか、就農初期の方やある程度経験を積んだ方など、段階に応じた研修プログラムを組む必要が生じている。

3 所感

- ・夏スイカ日本一の名を持つ尾花沢市のスイカは、先人から受け継ぎブランド化されてきたが、就農者の高齢化、担い手不足が課題という事だった。全国的にあらゆる場面で高齢化、担い手不足という話は耳にするが、この地域は行政と農家がしっかり手を取り、守るべき産業を守っていこう、続けていこう、という力を感じた。補助額も、補助内容もとても手厚く、人とも繋がり合う事業となっており、その地域のスイカ農法をしっかりと引き継ぎ、移住にもつながっていく素晴らしい取り組みだと感じた。しっかりと守るべき産業を守るための支援の必要を感じた。
- ・「尾花沢すいか」のような農産物の全国ブランド化は、経済の活性化に非常に有効であると思った。当市もニューサマーオレンジ他、農産物のブランド化をJAだけに任せず、市として推進する必要性を強く感じた。「銀山温泉」「花笠踊り」という強力なコンテンツを軸として、観光や農産物販売の拡大に、市として積極的に取り組んでおり、観光経済が一体となって回っている点が素晴らしかった。就農移住者支援事業は、独り立ちまで手取り足取りという、丁寧な実施環境を整えていたのが良かった。全体として、行政とJA、観光協会が一体化し上手に連携して観光経済を推進しているように見えた点は、本市でも大いに見習うべき所であると思った。
- ・尾花沢のブランドであるスイカを守る為の新規就農支援であると同時に、移住定住施策でもある。むしろそのほうが強い。基本的に食べていけるぐらいの収入を得ることができるように就農支援をして、移住をしてもらう。尾花沢すいか農学校を通して5年間もサポートしていく仕組みは素直に凄いなと思った。説明いただいた議長様、農業委員会の方の話しぶりから並々ならぬ思い入れがスイカにあるのが感じ取れた。広報や、イメージの力というわけではなく、尾花沢スイカは品質が市場に認められてブランド化していったので商品力が強い。伊東市は少量多品種で耕作

面積が少ないので、イメージ戦略の「鎌倉野菜」のように、同じものでも価格を上げる戦略が向いていると考えているが、商品力を上げるという戦略は正攻法なので、本来なら同時進行すべきと改めて感じた。

- ・ブランドすいかを守るために「尾花沢すいか農学校」を創設しており、研修期間は国の支援制度を利用せず、より手厚い市独自の支援を実施していた。収穫後の時期も他業務を請け負えるため、生活への不安が少ないのではないかと。新規就農者だけでなく、受入れ農家にもわずかながら支援があることは、どちらにも活用しやすい制度と思われるが、本来国がしっかりやるべきことと思う。最低限、国と市の支援が併用できればより安定した就農支援になるのではないかと。第一次産業で全国レベルのブランド作物を生産できることは大変魅力的であり、本市でもしっかりと根付かせられたらと思う。

山形市

- ・市制施行 明治22年4月1日
- ・市の面積 381.58km²
- ・人口 240,159人 (令和6年9月1日現在)
- ・世帯数 104,426世帯 ()
- ・令和6年度当初予算 一般会計 1,021億1,800万円
特別会計(8会計) 507億 922万6,000円
企業会計(4会計) 428億1,411万円
- ・市の概要

山形市は、四方を山々に囲まれた自然豊かな街でありながら、都市機能も充実した暮らしやすい街である。また、城下町のたたずまいを残し、歴史・伝統・文化を大切に受け継ぎながら県庁所在地として発展してきた。平成31年には中核市に移行し、村山地方6市7町と山形連携中枢都市圏を形成し、様々な連携事業を実施している。魅力は、自然、歴史、そして食であり、盆地である地形の特性により寒暖差が大きい気候環境と良質な水に恵まれ、美味しい農作物が育まれ、特産品になっている。温泉の多い山形県の中でも山形市は蔵王に代表されるような多様な泉質の温泉がたくさんあるほか、芸術の分野でも日本有数の本格的オーケストラである「山形交響楽団」が活躍するなど、特別なものが身近にある街である。

○ 居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりについて

山形市を訪問し、居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりについて、山形市まちづくり政策部まちづくり政策課 大沼功 課長、田中賢一 街路係長、軽部隆征 都市計画係長からご教示いただいた。

1 粹七エリア整備事業について

(1) 事業の概要

- ・ 中心市街地の七日町地区において、都市計画道路整備と併せた沿道整備街路事業により、七日町東土地区画整理事業を実施している。世界かんがい施設遺産に登録された山形五堰「御殿堰」を活かし、風情ある景観の形成、小径と広場の整備による回遊性と滞在性の向上により、歩くほど幸せになるまちの実現を目指した。
- ・ 沿道整備街路事業の最大の特徴として、土地の移動や入れ替えが簡単にできることとなっており、転出希望者から道路用地として買収した土地を、都市計画道路区域内の残留希望者の土地と玉突きで移動し、何段階かの玉突きによる土地の移動を行うことで、最終的に都市計画道路や区画道路の用地が確保される。



御殿堰を活かして整備が行われている



まちの風景はエリアごとに変わっている

(2) 地域住民との協議について

- ・ 地権者、まちづくり専門業者及びその他関係者が集まり、隣接する小径や広場、御殿堰の整備方針、また、維持管理などに関する意見交換を行った。意見交換をするに当たり、集まるグループを小径や広場ごとに分けており、小さい区域で関係者の人数を絞って行っていた。
- ・ 小径と広場に関する意見交換を行うほか、街並みの景観を検討するためのグループも作り、事業区域全体の目指す景観像の実現のため、景観デザインのルール、また、屋外広告物についても、既存の許可基準に加え、地区独自の基準について意見交換

を行った。

2 居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりについて

(1) 社会実験について

- ・人が多く出歩いて賑わう1日だけを生み出すのではなく、普段の365日に人が出歩いているようなまちとするため、様々な社会実験を行うこととしていた。社会実験は、将来的に民間主導にすることを前提としてメニューを選択することとし、できることやできそうなことから開始していた。
- ・社会実験を開始する際には、市が広報、道路占用許可、交通規制に関する届出を行い、商店街などにはどのような企画を実施するか検討してもらうほか、店舗前のスペースも活用できるように什器の設置をするなど役割分担を明確にしていた。社会実験を重ねる度に、市で行っていたことを順次、商店街などに行ってもらったこととしていたが、協力的な商店街でないと実施は難しいため、社会実験を行う際には、場所の選定が重要であった。
- ・社会実験は、すずらん商店街と七日町大通りで令和3年度から行っており、すずらん商店街では、歩行者天国、Parking Day(過去にパーキングメーターを設置していた場所を小さな公園に変える)、Parking Day×キッチンカーを行い、七日町大通りでは、車線を減少させて広場を作る、歩道への滞在什器設置、通りに面した広場に什器や人工芝、パラソルを配置して憩いの場を創出していた。令和4年度からは市役所の敷地も活用することとして、キッチンカーを集めたり、人工芝や遊具等を置いたり、様々な社会実験を行うなどして、市役所の敷地を利用する取組に関しては令和6年度から社会実験ではなく、什器の設置や人工芝の敷設については常設することとしていた。
- ・社会実験の実施に当たり、当初の目的の1つとしていた民間主導への移行については、令和4年度からはすずらん商店街が主体となる、すずらん☆ナイト×屋根のない美術館、すずらん☆ナイト×モンテパブリックビューイングのほか、東北芸術大学の学生も参加した、学生×ストリートファニチャーの実施に至っている。

(2) 今後の課題について

- ・様々な社会実験を行う中、繁華街で什器の設置を行ったが、什器の破壊行為や、ごみの散乱などの問題があり、設置場所によっては永続的に行うのは難しいとの判断に至った。

- ・社会実験を行うことにより、急に大きな賑わいが生まれるわけではないため、市民や庁内から理解を得ることが難しいことや、民間に主導してもらうためには、民間側に主体となる人がいることが必要であるが、人材があまりいないことが挙げられた。そのためには、可能な限り、市も伴走していく体制を整えておく必要がある。



市役所の敷地内でも社会実験を行い、遊具や児童書等が置かれていた



社会実験で広場に人工芝を敷くほか、植栽や什器の設置もしていた

3 所感

- ・3日間の視察を通じて、おらが町、我が町に対しての市民や市役所の職員のシビックプライドの強さがすごく、どこの部署も、2～3人の担当で事業を実施していたため、あのパワーはどこから生まれてくるだろうというのをすごく感じた。特に山形市においては、まち作りをただ絵に描いてるだけではなく、3人で大きな市街地のエリアを、1軒1軒訪ねて、この下に昔の用水路があるため、掘り起こして、昔の姿にしたいという熱意を伝えており、もしここができなくてもしょうがないから次の地権者のところへ行くような取組をしていた。それによって市民の人たちも協力しており、市民と市役所との連携関係がすごくいいなと感じた。ちょっと難しいからやらないのではなく、難しいけどやってみようよというトライ&エラーの精神を皆さんが持っていることが、まちづくりに非常に有効であると感じた。当市を含めた、普通の自治体では、市民は行政がやっているから任せておけばいいとなったり、市民が言ってもなかなか行政はやらないから、そこで壁を作るのではなく、とりあえずやってみて、最終的にこうなればいいなという共通認識をすごくイメージ的に捉えていくことが、これからのまちづくりに一番必要であると学んだ。

- ・山形市はまち歩きを推奨するため、ソフト、ハード両面からアプローチしておりその取り組みを詳しく知れて大変勉強になった。ハード面においては、しっかりとこの地域を歩くエリアとリサーチがされており、そこから生み出す未来の形をしっかりと地権者、地域の方に表し、理解をもらいながら、自分事として参画してもらう一連の流れがとても素晴らしく見習うべき事例だと感じた。ソフト面においても、いずれ民間が自らまちの賑わいを創出できるよう、社会実験をたくさん行い、まずは小さくやってみる。そして住民の意識が自らやってみたい！という意識になっていく。そしてまちに賑わいが生まれる。と大変素晴らしい取り組みにわが町も見習うことがたくさんあると感じた。
- ・「居心地が良く歩きたくなるまちなかづくり」の推進について、まちづくり政策課だけではなく、都市計画課と分割して担当し相互連携している点は、本市でも見習った方が良かったと思った。都市計画道路の推進における地権者との交渉等の難しい業務を、市の中堅職員が自信をもって推進できているのは、市長をはじめとした幹部のリーダーシップが発揮されているのだと感じた。社会実証実験として、トライ&エラーを積極的にできている点は、見習うべきところがある。また、コンサルタントではなく、大学と連携して実施している点は、是非、本市でも取り入れてもらいたいと思った。
- ・中心市街地の街路整備事業において、沿道整備街路事業で転出希望者から買った土地を、残留希望の地権者の代替え地として付け替えることができる「柔らかい区画整理」の手法が参考になったのと共に、周辺の大きい道路を車に重きをおいた環状道路とし、環状道路の中は人優先の心地よい空間にするという考え方が参考になった。確かに太い道路というものは一種の心理的抵抗をつくると思う。伊東市に置き換えると、駅周辺で、湯の花、キネマなどは大きな通りに挟まれて、その中にある商店街は歩きやすいスペースになっていると言えるが、海、大川、東海館など、観光客が魅力を感じるものがその枠の外にあるので、移動の心理的抵抗が作用して、目に入って立ち寄れるようになっていないのではないかと感じた。つまりはその場所が目的として向かっていく場所になっている。この街路整備事業の上ののっている「居心地が良くあるきたくなるまちなかづくり」事業だが、環状道路の中のエリアを「人を優先する」の考え方で行われており、商店街との社会実験において、滞在空間創出として、商店街の歩行者天国で人工芝を引いて、その上に椅子やテーブルをおいていたが、たったこれだけのことで、空間に区切りができ、かなり居心地

のよさそうな空間を作っていた。これは簡単に伊東市でもすぐに応用できると思う。あと、「まずはやってみる」という視点が行政らしくなくて良かった。環状道路の内側にある市役所もその「居心地が良く歩きたくなるまちなかづくり」の一部となっているのが良かった。市役所の敷地内に休憩スペースがあったり、キッチンカーを市役所の敷地内にいれて賑わいをつくっていた。伊東市においても下側玄関前の噴水スペースと、物見塚公園などとの一体の利用ができるのではないかと都市計画、歩きたくなるまちなかづくりは抜きにして、単純に親と就学前の子供達が集う場所的な使い方はできないものかと思った。山形市役所には子供用のスペースもあって、図書館の捨てる本や、わなげ、シャボン玉キットなどのが収められている棚があった。伊東市役所なら多くの人の目があるし、見通しもよく、親が少し気を抜くことができる子供達がちょっとした遊びなどをするのには向いているのではないかと思った。山形ではビルの合間にある空間を「ほっとなる広場」として、簡易設置のブランコなどをおいていたが、その感じでもいいと思う。その他、暗渠になっていた用水路を開放して景色の一つとして活かすのも良かった。水の流れは人を惹きつける部分があると思う。そういう意味では伊東市は大川を活かす方法を考えるのも必要だなと思った。大きな道路が心理的負担になることを考えると、中央通りから西小の方にて、通学橋から音無神社、そして松川遊歩道、東海館、海、みたいなルートを通して楽しめる街作りも必要なのではないかと感じた。

- ・「社会実験」によるトライ&エラーに貪欲というか、良い意気込みを感じる。暗渠だった堰を掘り起こし、周辺を点から線にする計画を市民と共有していた。城下町のDNAに働きかけ、うまく協働しているのではないかと。そこに居ることが目的となるスポットの整備だけでなく、道路整備と併せて行っている。街づくりには必須である。歩ける範囲に観るものが複数あるので、整備しやすいのかもしれない。大工事ではなく、可動物を多用しているのも柔軟性があって良い。視察を行って、3市とも国の制度を上手く利用し、市民と協働されている。補助金のためではなく、市行政を自分ごとと捉えている様に感じられる。資金・担い手不足に関しては全国どこでも問題を抱えているが、牌の取り合いでなく、その地域の良いところを磨き上げる施策につないでいければ良いと思う。

以 上